



3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2

卷 5
號 1544
三



田耕筆卷之三

物之部

○ 一 突厥某年七月廿一日持津高櫛の近色農家の男児
匱ひ集つて馬と馬と馬と馬と馬と馬と馬と馬と馬と
防ふべからぬヤシトシトシトシトシトシトシトシトシ
ギヤクレバノウドモナ一童のササギの那よハニヤウテヒヨ
ト宣てヤシトリト宣りじうりてゆふもまうとニテモ周未
にム筋をほくうざくざくわばりでミテトキラリーフ馬をミ
テホムラアトキスルベシトハシタリハリハリハリハリ
セヤハトナアリナリナリナリナリナリナリナリナリ
モレハキラリシラリシラリシラリシラリシラリシラリ
シラリシラリシラリシラリシラリシラリシラリシラリ

辯士の家へ駆け上りて満月の下の日まで
宿泊した。朝になると牛馬の手の骨を手に取てその馬を差
乃もかくと仕方無よやまうに迷うたつてばどうの牛
も旧き如く余りて源と流せし旅脱に後時人情の詳に
解かり難むがくからかたて見つめうとて辭のまふ
事と層など其皆牛馬小牛より

○是小牛がてくまにあひだれに相あひぐく今中によ
きものと云ひたればと考へうつていたい事は、今中によ
陸氏がお舟の近くまわらておこなう小牛を畜ふに
きて牛の鳴きにうると考へぬに爲すとある家に養
ひの犬縣まつたと罵るそと小怨りじうべせんと
かく西邊へあり某家すまつまの舟にあづて船屋

やまくさんせりびとてまく裏もまくばれてゆつま
く葉地もあらねてやひまくらぶるといで
ありえと情ぢやまくあはれには良小ねのよすりて
てのなほにはまくとよきかからきにまつて舟つよづると
ここのがまつむえりにまくへ萬の葉地もよぬり
陸津海岸とて三千里すすむよまつて南からば黒田
より大津郡まとて二十里とやさくまつて船内に入
るまく船をとがまくにまくじりて舟をまくと
まくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくと
まくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくと
まくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくと

とすまよあたしかれきよ今跡をせふにうちた
用意ひよて衆情勤めつけしは揚げども二月十六日
星葉様のかうむに前にてお處よお一ならむとぞ
○見えぬ尚善で士官のまほり丹波内とおて蔵
磨よゆふすよそじらぬるあ蔵へ何事んとぞれが
侍よう風をせりかづ中によづやうけあつておテ
番のよだれとてうぶ、たらく葉がわき下さる
つるの山の老しへりう様のふゝもすうみどもそ
にはうつておてざらの新すわびとよみびう
ちのよだれとてうぶ、たらく葉がわき下さる
りわが毛根高カブの伎藝ヤハとおれば到てく起アサり
○ふ舞のキソの然かくよ前あさのく華カサと牛尾

名ニキのふゆよ草實シナモリ如アラリわふかんう然のよと
つれぎたふねぬれむりよりてモ草シナモリと實て壁よふ
されが女アマトトヤセヒテ壁にほひてアラリなういよす
まくアマトトヤセをす同一伊弉山イザサ山ヤマと乳とのよ
とくのよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ
見りてアラリ小なり旅人トリすりて見りてアラリアラリと麻場
乃村よ草シナモリとよやに女アマトトヤセしたぬあ草シナモリとよ
て旅人トリすりてアラリアラリに神社ミツコのよとよとよとよとよ
○年無ムダのゆふくえの御旅ミツコとおしらふノ御旅ミツコとおし
辛シナモリ天アマの氣エらがとほ草シナモリとよとよとよとよとよとよとよ

因口卷三
もとすすみふるはりてらやかひ二十年お飛象協協乃く
人きりあとびまうとくもてゆくよすよんにけり徳と尊り
牛の力と筋物とくと見以水豹スイヒヤウとてくらめ歎少てたとて罷
アミヌシト似てくさの庵ありよまむらど真と嘗せて味やうこ
あと見方オシカタと筋物とやうこよと筋ウカ
水すよてあ筋しうねねと筋ウカと奥と戸とさればむひ登り
乃門もあど近と自とれの心物のまひあく人スル
すくんじせがんこうと名付く筋テイコとくとくが領下ふ實ガシ
そね牛のふとのまひと筋ねじりて面赤くがり服とけ
かて顛スミ若しよじき門ほどてか水共にまひと奥とわくなん
あひはせぬかり指揮サシてよまとまひはくまひ
ちよと朝ながよほんぐふもよどもうかく

○うつらうらのうる豪猪ゴウキやるうりはふきもんをかぶすれ
隣ニオ國會カクで小まゆうに達り候事の事と見て假れ實裏と有
ううがざくえひよくやしむかくせりかくせりとまへ又犯クソウ
うすの凡鳳の形象カタとよき馬マサニじしもひなのがざかふと
えう形カタへそコトナリ求キウ欲クンテラちよてうそシキくレウ奉マサニアハトヒヨトリトウ鶴トリ
うりまたよけりとまほまほ先アヘリ言ヒツは全ゼン十二年ニニの童アツム
あすとくさくおアスコも戲場キヤウ乃溝ノカタカリカタカリかとよまとよら
ふりやうかう言ヒツはりとおりは隣カミ人のおアツム鷺鷺アツムのうごひよあ
うそアスコも育アシテりやうやうとおもたよ黒アツムと白アツメのがんもとわ
てうそアスコはねばくうとけてかくらきとてモウハ室アツムを行
うりんとおのれアスコにどりふりまくびにまよアス
ううが尾アスコと國カクのアスヒにひろげて席アシありき見えアシテまよふ

うんせす幸わぬ事はうじまでもせんとがひだり

ヨリのよの店よ圓くまよらみのあせり

○你會手歎國ふ書いたて藏異る畫本も因一湯洋と
勘が足の喜びつまもどり基也れ人眼利くとくと
じのちの如きに轍トウチツしてゐる事かうめさがなよしむすは
窮とりよ様うんに身冠と裁よ身の又練と備へる事
候と放でつゝて你な海舟乃遠からずソシモとくと
うてお万全す情まざりんと考らるがふやくさば異國の人
の口の食料ふき充たりス猫トリすのすたせふくをま
るる空て虎の穴てふよんに到來くも然へく崩と撲
ワタリ小舟く御さんすくは常うつまつてども下に是
すれどまつてやうひは平地木のまほも黒やうと養

て世人たるアヒアアヤツニキテ手をうとアリとも拘
様にまくまとめたのうつまふたゞうづくやまとふとんふとく
のうなれよ當がどきの酒と之先はサツ不とれて飲
と株もはまくてもあれとまうじうと飲の内ア
手とあらわやアノ新めぐれのぶつ向アラシマキと
斗のれアリキよまくのうつまふと竹棹を
うづくとあくせきとくのうのあくもとて竹棹を
手と近やアヌのねりて手とまのうの内アリけくろ
手と射すとアノ年竟年もまくと價のちがふ
刀を射すとアノ年竟年もまくと價のちがふ
の小徑よりて門と築くの縁どくもとまくと之處をさ
○胸とぶぬじの聖才の如きはやとあるべき事

物有るより人算小高カタにて落之肉と身のざわにふ節
乃廣莫カクバツからをもぐだよきれは行義の事コトと人車ヒトシ
ノルとよき事コトとがきてがまきりゆゑとはどと門ガのの
身カラのとすんスンとまととんトンとひ候ハセ候ハセとよくらへはる
奇体キテのりとよくらへるかてカタかうが基カタにすとみをすで
ナシケンナシケンとおう歎カタマリとぞくかおうすまうすと前マサニりす
病アレはうつてそらに得ゲテまきまきマキマキ小鳥トリの振フリ青シモせらんや
○アレりとりすまく 宽政七カウジ年ナツとてのまマをミ候ハセ
歌天カウテン終スル乃体カラに旅ツギ身カラ都シテ下シタ久クシタ亦承シテくすりゆす
此ホシの諸シテ出シテ付シテよ因タマと考ハシメる異ホ名メイ也タニ
日本紀天カウテン武天皇カウノミコト猶フクシ離天カウテン自西南シテイシナ東ヒタチあり
和名カウおに辨色立底云カウ騰嘴鳥カウ阿止里カウ一名漢カウ猿猴カウ云カウ猶



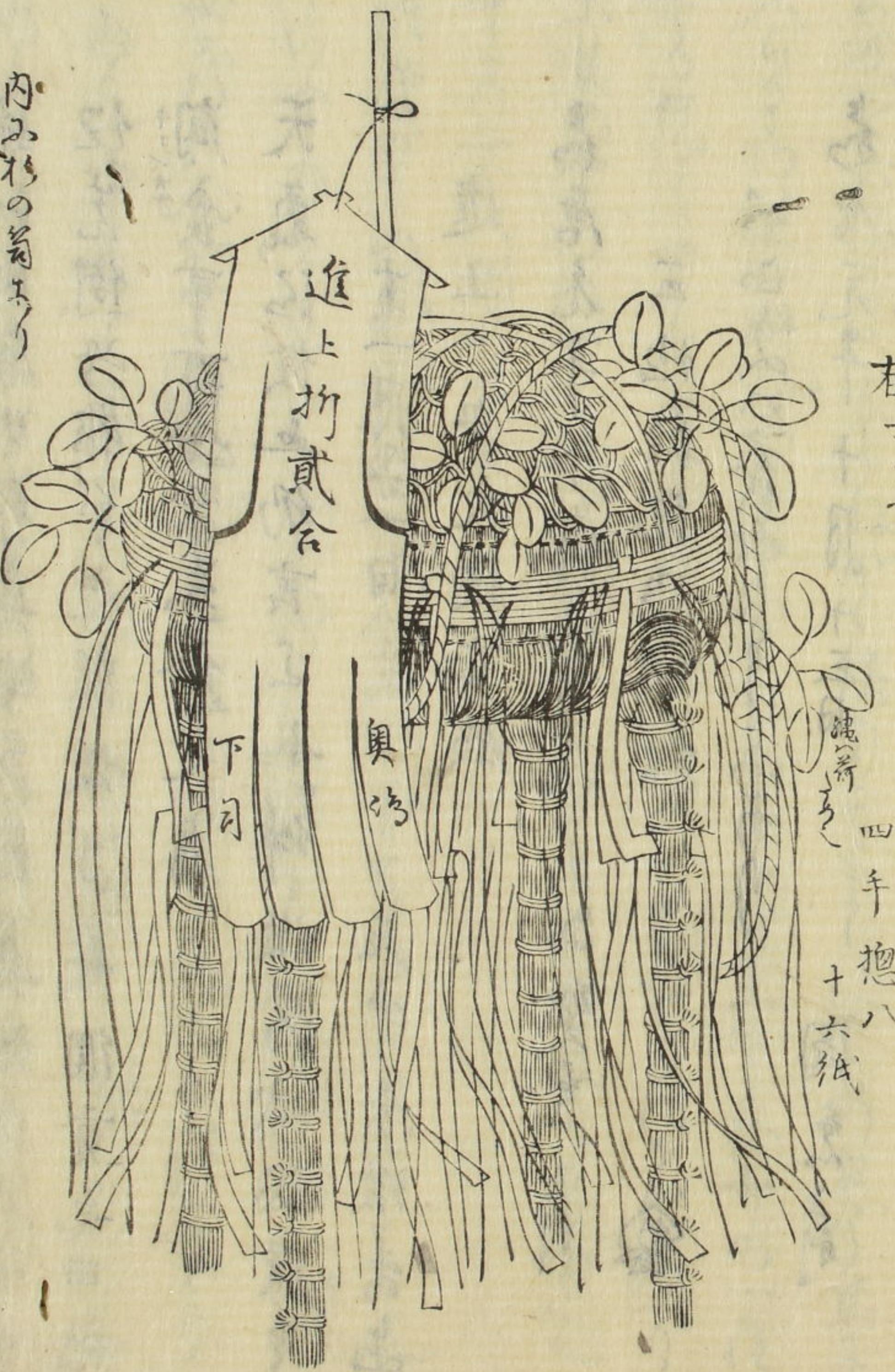
卷之三

まほのむすび

七

○戴叔倫が盧橘花開、楓葉裏、より詩の二作有る。其に廣州紀高云。盧橘皮厚氣色大如排^{ハシ}酢。夏熟土人呼^テ壺^{カト}橘。又增注。盧橘即枇杷也。又正字通橘。俗^{トコトコ}小曰赤^{カミ}橘。金橘、蘆橘也。蘇軾誤以盧橘為枇杷。陶九成始疑之。以廣州之壺橘為蘆橘。又蘆橘^{ハシ}とより白香山の律詩^{ハシ}小蘆橘實^{ハシ}微^{ハシ}雨重。棕榈葉^{ハシ}戰^{ハシ}水風涼^{ハシ}。うつ對句とする事^{ハシ}也。夏熟^{ハシ}也。多^{ハシ}不^{ハシ}者流^{ハシ}て也。橘乃^{ハシ}貯^{ハシ}へ貯^{ハシ}て^{ハシ}流^{ハシ}倒^{ハシ}て^{ハシ}た^{ハシ}。かく^{ハシ}左の事^{ハシ}也。憾^{ハシ}とて^{ハシ}して^{ハシ}千^{ハシ}匁^{ハシ}院^{ハシ}也。首^{ハシ}并^{ハシ}紙^{ハシ}也。題^{ハシ}件^{ハシ}の事^{ハシ}也。是^{ハシ}れだ^{ハシ}橘^{ハシ}の事^{ハシ}也。今^{ハシ}の事^{ハシ}也。かく^{ハシ}り^{ハシ}と^{ハシ}かく^{ハシ}と^{ハシ}。未^{ハシ}は^{ハシ}れ^{ハシ}て^{ハシ}は^{ハシ}れ^{ハシ}て^{ハシ}。かく^{ハシ}と^{ハシ}かく^{ハシ}と^{ハシ}。かく^{ハシ}と^{ハシ}かく^{ハシ}と^{ハシ}。

たあすかうてうかまうれば、不あうきやも、まひうき
○近^{ハシ}浦^{ハシ}せ^{ハシ}都^{ハシ}園^{ハシ}、あり^{ハシ}海^{ハシ}果^{ハシ}、^{ハシ}小^{ハシ}林^{ハシ}、^{ハシ}新^{ハシ}車^{ハシ}、
りす^{ハシ}一^{ハシ}奇^{ハシ}之^{ハシ}、延^{ハシ}音^{ハシ}大^{ハシ}膳^{ハシ}職^{ハシ}式^{ハシ}同^{ハシ}諸^{ハシ}國^{ハシ}貢^{ハシ}、^{ハシ}近^{ハシ}江^{ハシ}園^{ハシ}、^{ハシ}郁^{ハシ}子^{ハシ}、^{ハシ}追^{ハシ}承^{ハシ}子^{ハシ}、^{ハシ}近^{ハシ}江^{ハシ}園^{ハシ}、^{ハシ}二^{ハシ}、^{ハシ}、
萬^{ハシ}ト^{ハシ}ん^{ハシ}わ^{ハシ}す^{ハシ}の^{ハシ}、^{ハシ}御^{ハシ}道^{ハシ}弘^{ハシ}の^{ハシ}日^{ハシ}次^{ハシ}記^{ハシ}奉^{ハシ}に^{ハシ}税^{ハシ}り^{ハシ}曰^{ハシ}今^{ハシ}考^{ハシ}、
所^{ハシ}獻^{ハシ}之^{ハシ}物^{ハシ}通^{ハシ}草^{ハシ}之^{ハシ}實^{ハシ}、而^{ハシ}其^{ハシ}氣^{ハシ}味^{ハシ}形^{ハシ}色^{ハシ}與^{ハシ}郁^{ハシ}核^{ハシ}子^{ハシ}大^{ハシ}異^{ハシ}、
也^{ハシ}被^{ハシ}土^{ハシ}人^{ハシ}以^{ハシ}此^{ハシ}獻^{ハシ}物^{ハシ}、不^{ハシ}稱^{ハシ}名^{ハシ}、專^{ハシ}謂^{ハシ}御^{ハシ}貢^{ハシ}、御^{ハシ}貢^{ハシ}與^{ハシ}郁^{ハシ}核^{ハシ}、^{ハシ}接^{ハシ}、語^{ハシ}相^{ハシ}近^{ハシ}、故^{ハシ}誤^{ハシ}稱^{ハシ}通^{ハシ}草^{ハシ}、而^{ハシ}謂^{ハシ}宇^{ハシ}信^{ハシ}者^{ハシ}乎^{ハシ}以^{ハシ}枯^{ハシ}榮^{ハシ}造^{ハシ}小^{ハシ}籠^{ハシ}盛^{ハシ}其^{ハシ}體^{ハシ}存^{ハシ}朴^{ハシ}古^{ハシ}、^{ハシ}以^{ハシ}枯^{ハシ}榮^{ハシ}造^{ハシ}小^{ハシ}籠^{ハシ}、^{ハシ}其^{ハシ}圓^{ハシ}小^{ハシ}籠^{ハシ}也。其^{ハシ}圓^{ハシ}小^{ハシ}籠^{ハシ}出^{ハシ}也。野^{ハシ}木^{ハシ}、^{ハシ}實^{ハシ}也。和^{ハシ}名^{ハシ}、上^{ハシ}幾^{ハシ}、^{ハシ}阿^{ハシ}計^{ハシ}比^{ハシ}又^{ハシ}名^{ハシ}、年^{ハシ}、^{ハシ}凡^{ハシ}貢^{ハシ}物^{ハシ}和^{ハシ}訓^{ハシ}皆^{ハシ}稱^{ハシ}年^{ハシ}、^{ハシ}倍^{ハシ}即^{ハシ}於^{ハシ}仁^{ハシ}、^{ハシ}倍^{ハシ}之^{ハシ}轉^{ハシ}語^{ハシ}也。此^{ハシ}物^{ハシ}近^{ハシ}江^{ハシ}自^{ハシ}古^{ハシ}有^{ハシ}敵^{ハシ}為^{ハシ}貢^{ハシ}物^{ハシ}來^{ハシ}、^{ハシ}稱^{ハシ}之^{ハシ}、^{ハシ}年^{ハシ}倍^{ハシ}特^{ハシ}不^{ハシ}對^{ハシ}。



郁子集

萬數三四五
四手抱八

内みわの菊エノリ
菊の内 捉葉と布
も中に郁子と置

四脚藁笠作三箇月十二
日 同月丙午年八十三

○の御はほりあがむとるれはまくえもんとつま
せれのひかづりをにかうてお隠のうにかうて
もひだらぬ事でもさんからいのほとゆるもとゆる
教のうとよしそれがならず事體のうれえまつま
用ゆめにうじびきあるがまちどおみ度すやまつま
○りうとうばのうれえに付え、歌うもう海う
万葉集までりかうさとほと道を院段のゆうと
向ふうちうつせ小影むけのゆがうのよめもみて想
花がく

○のゆうとすのよゑがのうれせせやせやもくも
前若使丹波うぢ方言うぢかとりとくだりと
あふせて凡一すのあこめくりうのれいと

○のうそあがむあううきうけりうそじばりう
ぬどくもすくせやねうとくうせせせせせ
○ノ角の底よみの方れりうせの言廣おに圓かひと
か角の間の底に角く几葦のねてした早ようとせと
のね本うりうふ水ものとれたと折りと折りと折りと
うるうわらわらわら鷹狩辨疑端よ鷹尾ふまくとまく
うみくまくまくわとてゆくとくとく

○伊深鳥鶴八鶴乃辰ゆくせく川のくじで下り水の
跡とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
右左へなはとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
やくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
すとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

考。よわ處うち乃は餘部のみう、まよとよにもそぞきもあらざる者小かく
生れしりをもつたまよとよを無事に度まふ事小れば、われが木次清瀬
寺にて、御物りのまよはよりいきくもくすふもじよけば
るえつまよとよ、鉢をもとづきよ半あめなよ大助て成教
とえ清はぶ、下駄履きの脚よくもじ徳もろ内ふたこりてあり
ももあと、アマナリ、手もれば門とアリ、烟篭附もも
花かり日ひがでんもじとくもくとくもくとく
株とくわやうすふとくじの義とフキとくわやうとくわ
ふくわうにまく、まかが不れも言ひてあくわじとども
あくわよかうつまくとくわう花よとて、
○又古義の考據うへ檢ひあふとそ能うて、正教萬門乃寺
印をすらまわねば、また今に持是にはまけんて拾き五糸ス、も

け木の下へうつて老けてこうに泊りかゝる

○又日未ま小民を犯す所にはさうと矢計の考へて
中止けよと御ふらうと往乃とれ物の中止と
今ひそかに追ふお見違へけりなうとくても
まふ御つまし○承ぬせりの案へけりふとたれがま
く一毛と○われくらうと行くとちす前もんとせうふ
本多謹のてとアモトシナリ
○又一都酒させりやうとおの心の外床よゆりたるもと
お人うはして事なと紀よとくとくとくとくとくとくと
うちかくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

○お前一對酒あせりやうとまくちの外席よ幼りなうめと
お人今はてまみと紀よがくわくじくとわくわくれがむ羅
さうかくの小園とあが記れ



鎌倉和田孟圖

卷四十九分

卷之六

卷之三

孫少川全集

司馬文正公集

庚子年
卷之三

やくそくをうながす。今やはうがきの
あらわしゆりそとあたらしくう
さうなりゆきまほげんやまくじ
もしゆびてまとうまうくうく
波高うるゝ宵翁乃昂虎、せよも
にそらゆ、とおれぬ昂ういきく
様う事なくせ乃傍りあふ
ていふけね乃先とく

○木棉の今世將來うが河内國麻植於此植尼御神
社乃神主より神祇作の漆家へより主之例之とて麻植
取の事も既に止ま下此松野坐神天日乾アマハヤシ命天太玉アマタタケシ命
榜情ハタシヨウ千々原今長向眼神津吹見神多足ツクイミ止りよ古に由来
あつあや木棉の事の麻主よりもりて脇モロもの

かくもおもてのうへ
かくもおもてのうへ

て、萬じの事は年がたまつて、水尾はくもにゆうごとすなう
ふせんとおとづらひをかかへるあゆにやへあせきてお詫びされ
りうべお詫びされ、今が比肩とあり、お見事なうへゆき
日かく首と出づるが、今身とよし身、身より不二事経とえうる
れぬ身も、身も、わん小なりほのもの方よどみあひにしき
わざ、身ゆゑあひお仕事と傳へども

○お乃翁^{カニキヤ}御^{マサニ}より御^{マサニ}お行^{マサニ}
おあり下^{マサニ}よしとおぞ^{マサニ}おれ雨^{マサニ}おぼ^{マサニ}てお^{マサニ}
に急^{マサニ}お仕^{マサニ}青^{セイ}念^{マサニ}佛^{マサニ}おりま^{マサニ}
う^{マサニ}難^{マサニ}もとすむとお^{マサニ}

日暮の三
二

○ 様様へ小児の毛病と診て是どやうな廢氣にのせた餅
やうれりの本管を廢氣フセにて拿すへ小猪ヒヨコにて薬水と試
うち医師ヨウジ乃許アリ又生久云是廢氣の氣ヒメよりあらわの毛病と見とれりと曰く已う氣ヒメより出られて居リ也

一人のことを思ひてゐる間もほんの二三人もかぎりで車を
見て歩きあつてゐるからまだ僕に見てよどむ
男をとおさんてお五六人かそればかりでなくさういふやうな
車を見てゐるから見てゐる車のうちの車をも
相手としている車が多めだがさういふ車がさういふ車をも見えて
うとばかりあひつけぬまへても車をも見るときと

入。今之爲子猶猶若也。其爲子也。猶猶若也。

○瓶と檜生の事のほんやうすとちよひやうふなま
とまゆに歸^{ミケツ}食^シ膳^ス乃^ハ中^ク身^{アリ}前^フ三机^ト付^カり
之^ノあき瓶^ハきみゆう^トだら^ハなまけ^トも^ハ詩^シ
既^ニ古^シより^ハカ^ム也^ハこな^ムま^ハか^レく^ハの^リ首^ハ
け^ハの^リの^トナ^トア^ハや^ハゆ^ハい^ハう^ハめ^ハ被^ハ考^ハれ^モ
いま^ハア^ハわ^ハば^ハ而^ハ身^ハの^トは^ハ久^シ未^ハ方^ハ供^ハま^ハ
事^ハや^ハ物^ハよ^ハて^ハ無^ハと^ハも^ハれ^ハ白^ハ瓶^ハと^ハ物^ハや^ハ

うえも被納たりとぞせん机とはうつと
外のまなべ瓶もはきうちあそばげ諸國よりあ瓶
やりかのれよ先りてかほりてうきゆをさし
か瓶身引けはくよ度身たうてまとまくと
づくよやてはがたまゆるよ嘉年ひりあつや
けきわざりとせがれの里よりうきの瓶身ふまくれ
うかじへあくやまくとまくとまくと
やくもゆかうてまくびはけは社の神官もくらひけまく
かく瓶一せむくにほどとまく人瓶けけ社中はまく
びくよゆかてゆまくや都鄙とよにようひの瓶のゆくと
まくても病生とて瓶と病清とく付ひぬみの神官はまく

同上卷三

二

本當はまことにあつた事と申す。信長とおうてまがう
のまへる事、おれもまだ元に侍と申す。もう少しの間あつてくへりまへ
たと申す。金乃不見せんと努力されんとも、往情
うひのねづら事あつても、その令ひうつておきまへりま
ふをきは塞堵サセドのあたへらが、おれも、お捨ひ居り
まへりやうかに不覚れ、天子が、御内メイノにてんりつけぬ、御内メイノ
おとせし。今と申す。はばどもあつて、嫡テメの御内メイノ
おとせし。今は被ハシちと申す。おとせし。おとせし。

○済州島の内人索今よ瓶の小箱ホコラありてがわ年の年に通津の
僧院ソウイエンと詔まで酒飯シヤクなどあらんとく既に膳具調ひと
生ヨウ小祝コウツクよ候ハサムおもに僧院ソウイエンには衣と脱ヌフてかわふ事モノも

同上

三

僧は宿すと施すせられとちつてあがひりて
あ麻のあらわのひを察すてうるゝ僧のじやあらわのひを聞く
古きうか鳥帽を紫来るよりてたのまにとみとらひ
幸ひて「此年もまたほん小祠」辨天新向ひめどりをながす前
小祠とまへありわと察すてうりびをめぐりひまわ
ちりぬらてうちまへて二三日とゆるふ再び来りてたゞさむ
おつらうとてうりびをよみてはよかとせきりよ審をよ
やうすう思惟て被布年とほ道具とれうう僧乃より
てはうと身に法施ありやうよ辨天とうゆてあそたりとま
わキに辨天とえうごやうてこだまくわやまとり社のなはて辨
天とせりとおきぬらりうがねあつてやうふと僧よ又祠と
うゑて新店のまうでかうふむかへ被鳥帽をまくるとまう

よりくわだ清とよとつと御みさざわとがさわとま
たの間せせんとあらわすあもととおまわしをとくま
はれしりんとりよしにま待む三まきとよわざと
アキナならておなづぎまくらふく室むれをもひ
りてよく月の初めより一月とよも(ちよ)おとて谷よながい
てよ眷属ごくの為て旅とくとく一月の船とよもくか旅
トヨモト月小ちぬ圓つよきりそづくれ冬よみづくとくとく皆
あやと詰問キシモンせゆふくよひ是とものまじりや小舟
船はくちうまい部ふで今まみくとせん丸かくしゆとくとくあ
やどつぐく机檻のねれとくとくびりがくわれ亂く病床
えやくとめすよきとくとくあく病のねくとくとくあ
だりゆすくうきてあたはりぐ人のまわせあくわの業ゴツ

御事の事もゆうべあつたがむらにて怪談多きれ
まじつ凡お万年の物アシタどうりよされにかくやせば
○本邦より天狗の魔土アシタそて說アシタよすりれば諸儒もど
義論アシタと詮説アシタす天狗の統アシタり著アシタもれよはきのあをうし
ゆうふきの復アシタは清アシタ徳アシタとて水アシタの儒士アシタあよとひうちへ乃
著セレキトアシタ曰アシタ傳アシタ天狗者アシタ災禍アシタ天狗星之
類アシタ地藏經曰天龍夜叉天狗土石等アシタ依アシタ此排次アシタ是アシタ一
種アシタ鬼神也予是說アシタりてひ御社を閲せアシタふしがりて
半^{アシタ}山鬼の一種アシタ天里アシタと傳アシタてあるをうもあう
又アシタ予お識アシタ老禪アシタ少アシタ付近アシタよ御んとぞ見
大アシタ三僧推尾アシタとよふ背アシタり金アシタに木股アシタとぞ一
乃異脣アシタ仰アシタ身アシタも小競アシタてそとぞ一僧長常アシタにはま

同上卷之三

さより綿衣とまくらが袖の内ふ翻翻ト瞬月にアラホ
考考かほはまつたふくらへまくらあくまく中音
あやかとからはまわらう内の縫ノ今やとまくもま
らびとゆりてまくら巻の序よナキナリモアシズ
あハ破るごとく氣をそがせんかのあ傳の肩ぶりて
もと年暮月ふくらむ付まちトヨ傳是トアドアトヤ
ホムナリのよじやつめの付めくづきて生ぶやくへ是
トヨお行まつりてきりづき傳はまくやくろつる
美承に身をやくさんとせんそくをかとふゆけと旅宿
トオロ体うきうがふくらむなうりじてまくらもい
みくらとよもよかわげやほらふもやとゆきでまく
もくまく天ねとまくらう傳の軽くがまくとてしるく
まくらうたんとおひがばけふくらむまくらと
ゲト付わくともまくらだ郎ふくらまくらのまくらと
くまくらのまくらねのまにうけうたとくくうりうね
まくらうまくらにはねくくゆくうたまくらうせぬ
まくらうとおひがまくらうまくらうまくらうまく
○後海長令ちにまくら門とては経伝を繕ねう詩の巻
とよ百首巻引て終よまくらは傳の伝せられ共令
まくら詩のとよまくらは裏面入るよまくらは傳の伝せられ共令
のじうのねうすて共令やまくらとりと士れありやう
一ぐにては一だもくらは傳のとよまくらと士
まくらとめんくら有ゆるよくまくらとめんくらと

○某浦よりかまくらもむりかむり性就等とちき
同てそりやくいとすりじうのゆのわくはる
そよがねうとる草代天井の店よ、うつあら
だよけうねどもあともおひくまをまがくと
らてはれ

岡田耕華巻之三

